

資料

看護学実習指導者が感じている指導上の困難と学習ニーズ

The Difficulties and the Learning Needs of Clinical Instructors in Clinical Nursing Practice Settings

酒井禎子¹⁾, 中澤紀代子¹⁾, 石田和子¹⁾, 飯吉令枝¹⁾, 加賀美亜矢子¹⁾, 小林綾子¹⁾,
山田真衣¹⁾, 後田 穰¹⁾, 岡村典子¹⁾, 高塚麻由¹⁾, 河野優子²⁾, 菊地美帆³⁾, 櫻井信人⁴⁾
Yoshiko Sakai¹⁾, Kiyoko Nakazawa¹⁾, Kazuko Ishida¹⁾, Yoshie Iiyoshi¹⁾,
Ayako Kagami¹⁾, Ayako Kobayashi¹⁾, Mai Yamada¹⁾, Yutaka Ushiroda¹⁾,
Noriko Okamura¹⁾, Mayu Takatsuka¹⁾, Yuko Kawano²⁾, Miho Kikuchi³⁾,
Michito Sakurai⁴⁾

キーワード：看護学実習，看護学実習指導者，看護教育，困難，学習ニーズ

Key words：clinical nursing practice, instructors in clinical nursing, nursing education, difficulties, learning needs

要旨

本研究の目的は、効果的な実習指導者研修会を企画するために、看護学実習指導者が感じている実習指導上の困難と学習ニーズを明らかにすることである。看護学実習指導者研修会に参加した実習指導者を対象とし、実習指導上の困難の程度を5段階で評価するとともに、困難を感じる具体的な内容と学習ニーズを自由記述で回答を求めた。41名中19名から回答を得た結果、実習指導者は、特に看護過程や実習記録に関する困難さを感じており、学生のレディネスが曖昧な中で看護技術の指導をすることへのとまどいも見られていた。また、実習での指導法に関する基本的な知識の他、実際の事例や学生の声を通して学生への関わり方を学びたいという学習ニーズを持っていた。このことから、現行のカリキュラムにおける学生の看護過程や看護技術の学習状況、また、学生や他の実習指導者の実習体験に基づく実践的な指導法が研修会の内容として求められていることが示唆された。

I. 緒言

A大学では、充実した看護教育を実施するために、臨床実習を行う各機関・施設等において豊富な知識・経験を有する指導者に対し臨床講師を委嘱し、これらの臨床講師をはじめとした臨床指導者と教員が連携しながら実習教育を進めている。また、A大学実習委員会では、これらの実習施設の指導者と教員が共に実習教育について学ぶ機会として、病院・施設関連の実習指導者を対象に、年1回の看護学実習指導者研修会を

実施している。

A大学周辺地域では、県看護協会にて、病院・施設に勤務し実習指導を担う看護職を対象に臨地実習指導者養成講習会が開催され、看護職が実習教育を学習する機会が設けられている。しかし、臨地実習指導者養成講習会を受講していない看護職であっても日々の実習指導には携わっていることから、そのニーズに応じて実習教育を学習できる機会を設けることや、社会の要請に応じて変化する看護教育の中で大学がめざす実

2014年8月25日受付；2014年11月26日受理

1) 新潟県立看護大学 Niigata College of Nursing 2) 元新潟県立看護大学 Formerly of Niigata College of Nursing

3) 常葉大学健康科学部看護学科 Faculty of Health Science Department of Nursing, Tokoha University

4) 関西国際大学保健医療学部 Faculty of Health Science, Kansai University of International Studies

習目標と学習内容について臨床講師をはじめとした実習指導者に理解を得、共に有効な実習教育の在り方を検討していくための組織的取り組みを整備することも大学が求められている課題である。

看護学実習指導者の実習指導における困難については先行研究でも報告されているが(細田と山口, 2004; 石崎と池田, 2008; 志田と袖山, 2011), これらの体験はカリキュラムや学生の特性など実習をとりまく背景に応じて多様性があると考えられる。そこで, A大学の看護学実習における実習指導者の体験の特性を理解し, ニーズに即した効果的な研修会とするための研修テーマや内容を検討するために, 看護学実習指導者が感じている実習指導上の困難と学習ニーズを明らかにすることを目的とした質問紙調査を実施した。

II. 用語の操作的定義

看護学実習指導者(以下, 実習指導者と略す): 看護学実習において, 学生への直接的指導や実習調整に関わる病院・施設の医療・保健・福祉関係者であり, 臨床講師としての役割を担っている者だけでなく, 日々の実習指導に関わっている看護職スタッフや実習調整に関わる管理者も含む。

指導上の困難: 看護学実習における学生への直接的指導や, それに伴う教員との連携に関して困っていること, あるいは難しいと感じていること。

学習ニーズ: 実習指導者として, 知りたい, 学びたいと思う内容。

III. 研究方法

1. 調査対象

A大学実習委員会が主催し平成26年度5月に実施した看護学実習指導者研修会に参加した実習指導者41名。これらの中には, 基礎看護学, 成人看護学, 母性看護学, 小児看護学, 老年看護学, 精神看護学, 助産学の各看護学実習に関わる指導者が含まれた。

2. 調査期間

平成26年5月～6月。

3. 調査方法

実習指導者が, 看護学実習において感じている指導上の困難の程度とその内容, および実習指導者としての学習ニーズを問う自記式質問紙調査を行った。

看護学実習指導上の困難の程度と内容を問う設問は, 主に実習指導者の学生や教員との関わりに焦点をおいた項目で構成した。項目として, ①看護過程や実習記録の指導に関すること, ②看護技術の指導に関

ること, ③学生の自己学習支援に関すること, ④学生との関わりに関すること(学生とのコミュニケーションや, 学生と関わる上での心理的側面への配慮など), ⑤実習におけるリスクマネジメントに関すること(ヒヤリハット対策など), ⑥教員との連携に関することをあげ, ‘非常に困難を感じる’ ‘時々困難を感じる’ ‘どちらともいえない’ ‘あまり困難を感じない’ ‘まったく困難を感じない’の5段階評価で回答を得た。‘非常に困難を感じる’ ‘時々困難を感じる’を選択した回答者には, 困難であると思う具体的な場面や内容を項目ごとに自由記述で記載してもらい, ①～⑥以外で困難に感じていることがあれば記載できるよう, その他の自由記述欄を設けた。

また, 学習ニーズに関する設問では, 今後実習指導者として知りたい, 学びたいと思う内容について自由記述で記載を求めた。その他, 回答者の基礎情報として, 年代および実習指導に関する立場を問う設問(A大学から委嘱された臨床講師/臨床講師ではないが直接的に学生指導に関わっている実習指導者/直接的な学生指導には関わっていないが実習調整等を担当する管理者/その他)に関する設問を加えた。

研修会当日に全参加者に対して本調査の説明書・質問紙・返送用封筒を配布し, 研修会終了時に, 本調査の目的, 方法, 倫理的配慮について口頭と文書で説明した。その後, 研修会参加者には, 自由意思により質問紙に回答してもらい, 質問紙の回収は, 質問紙に添付した返送用封筒を用いて, 研究者に直接返送してもらうこととした。

4. 分析方法

看護学実習指導上の困難の程度は, ①～⑥の各項目別に5段階評価の各評価を回答した人数を集計した。看護学実習指導上の困難の内容は, ①～⑥の各項目とその他の自由記述欄に記載された内容を項目ごとに, 学習ニーズについては知りたい, 学びたいと思う内容として自由記述に記載された内容を分析した。困難の内容あるいは学習ニーズとして一つの意味のまとまりを示す一文あるいは文章の一部を抜粋したものを類似した内容で分類した後, それらの内容を端的に表現する名称をつけた。これらの分析においては, 研究者間で分類や名称の妥当性を検討した。

5. 倫理的配慮

質問紙は無記名であり, 質問紙の返送をもって同意したとみなすこと, 協力は自由意思であり, 協力しなくても不利益を被ることは一切ないこと, データは厳重に管理し, 本研究や研修会の企画の参考資料として

のみ使用すること等について、実習指導者を研修会に派遣した管理者には文書にて、研修会参加者には文書と口頭で説明した。

なお、本調査は、新潟県立看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 013-20）。

IV. 結果

研修会参加者 41 名に質問紙を配布し、19 名より回答を得た（回収率 46.3%）。回答者の年代は、40 歳代が 11 名（57.9%）と最も多く、次いで 30 歳代が 6 名（31.6%）、20 歳代・50 歳代が各 1 名であった。実習指導に関する立場は、臨床講師が 13 名（68.4%）、管理者として実習調整に関わっている者が 4 名（21.1%）、臨床講師ではないが直接的な学生指導に関わっている者が 2 名（10.5%）であった。

1. 実習指導上の困難について

回答者が、看護学実習指導上の困難の程度を各項目 5 段階で評価した結果は、図 1 のとおりであった（以下、文中では各項目名を〈 〉で示す）。「非常に困難を感じる」「時々困難を感じる」と回答した人を合わせると、最も困難を感じている人数が多かったのは〈看護過程や実習記録の指導に関すること〉11 名（57.9%）であり、次いで、〈看護技術の指導に関すること〉7 名（36.8%）であった。「あまり困難を感じない」「まったく困難を感じない」と回答した人数が最も多かった項目は〈教員との連携に関すること〉（12 名、63.2%）

であり、〈実習におけるリスクマネジメントに関すること〉は、約半数（9 名、47.4%）が「どちらともいえない」と回答していた。

各項目で困難を感じている具体的な内容は、表 1 のとおりであった。以下、分析により分類された指導上の困難の内容を《 》、調査用紙での回答者の記述を「 」で示す。

〈看護過程や実習記録の指導に関すること〉では、「学校内で教育された内容と実際の現場では相違があるのではないかと思います、指導する内容について悩む」「患者の病態のアセスメントについて、的確なコメントができていないか不安を感じる」などのように《指導に自信がない》ことを挙げていた指導者が多かった他、業務時間の中で《指導の時間がとれない》ことなども挙げられていた。

〈看護技術の指導に関すること〉では、「自分の学生の時とは全く異なるカリキュラムのため、どこまでできて、できないのがよくわからなくなる」というような《学生のレディネスがわからない》や、「どこまで説明したらいいのか」といった《どこまで指導したらよいかわからない》とまどいが表現されていた。

〈学生の自己学習支援に関すること〉では、勤務等の都合上《学習状況の継続的な評価・確認ができない》ことや、「自己学習を行わせることが学生に負担となるのではないかと」といった心配も述べられていた。

〈学生との関わりに関すること〉については、助言

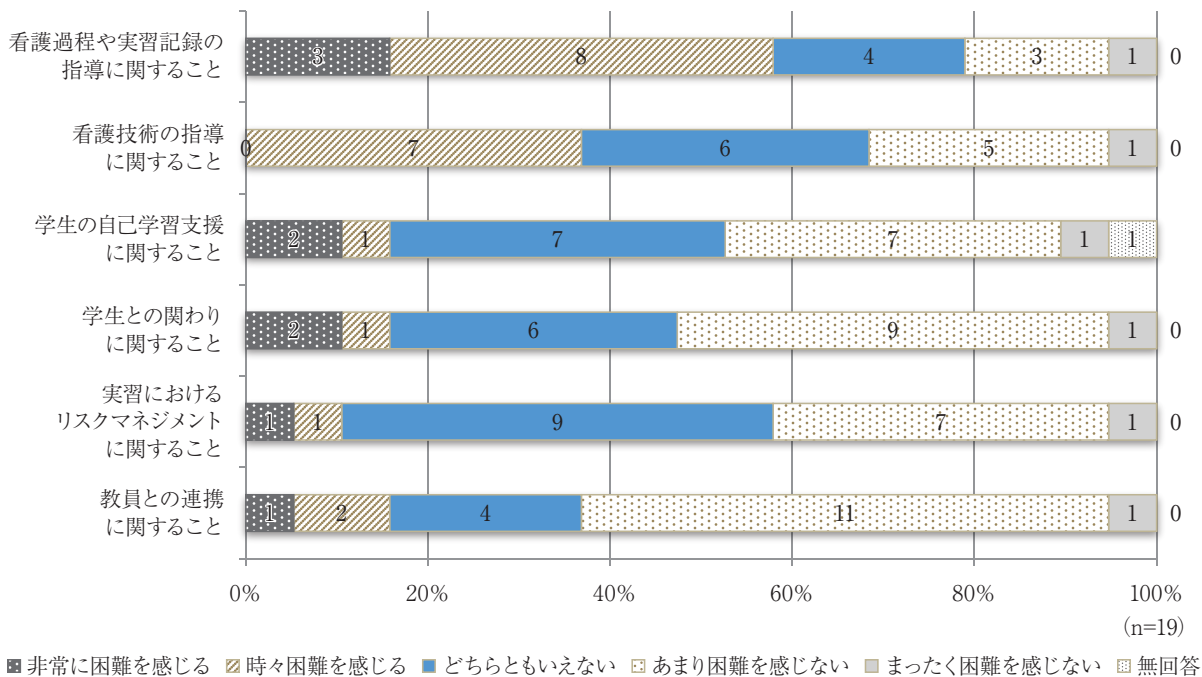


図 1 質問項目別に見た看護学実習指導上の困難の程度

表1 質問項目別にみた看護学実習指導上の困難の内容

① 看護過程や実習記録の指導に関すること
指導に自信がない 指導の時間がとれない 学生が書いているレポートと実際の実習状況に差がある スタッフに実習記録の指導を依頼する際の大変さがある
② 看護技術の指導に関すること
ベッドサイドでの援助場面を確認できない 患者・スタッフにより援助方法に個別性があることで学生のとまどいを感じる 学生のレディネスがわからない どこまで指導したらよいかわからない
③ 学生の自己学習支援に関すること
学習状況の継続的な評価・確認ができない 自己学習が身についているかの判断が難しい 自己学習を課すことによる学生への負担が気になる
④ 学生との関わりに関すること
助言をする際の学生とのコミュニケーションが難しい 学生が考えていることがわからない 学生のやる気が感じられない 指導によって学生が落ち込むのではないかと心配になる
⑤ 実習におけるリスクマネジメントに関すること
学生のリスクに対する認識が低い 患者に感染症が生じたときの実習上の対策をどのようにするのか
⑥ 教員との連携に関すること
担当教員の変更が多いと連携が難しい 教員の指導内容に疑問を感じることもある
その他
患者とうまくコミュニケーションが取れない学生がいる 学生の言葉づかいが悪い 病棟スタッフとの連携における難しさがある 学生が多いと圧迫感を感じる 患者選定が難しい

をした際に学生が素直に受け入れない、あるいは助言した内容を理解できていない時など《助言をする際の学生とのコミュニケーションが難しい》ことに加え、《学生が考えていることがわからない》《学生のやる気が感じられない》《指導によって学生が落ち込むのではないかと心配になる》というような学生の思いがつかめないことによるとまどいが表現されていた。

〈実習におけるリスクマネジメントに関すること〉では、「自分がやっていいことと、ダメなことの判断ができない」というような《学生のリスクに対する認識が低い》ことを指摘する意見の他、結核患者が発生した場合どうするのかというように、患者に感染症が生じた際の大学側の対応を問う声も聞かれていた。

〈教員との連携に関すること〉では、《担当教員の変更が多いと連携が難しい》こと、教員によって学生への説明内容が違ったり、指導者と問題意識が異なったりする際に《教員の指導内容に疑問を感じることもある》ことが述べられていた。

上記の項目以外に実習指導上の困難として記載された内容には、「記録、情報収集に追われたりして患者の側に行けない学生がいて、患者さんとコミュニケーションがうまくとれないことが気になった」のような《患者とうまくコミュニケーションが取れない学生がいる》ことや、患者に対する《学生の言葉づかいが悪い》という学生の実習態度面に関することが挙げられた。その他、「スタッフが前向きに学生の指導を行うための工夫」や経験の浅いスタッフが指導を担当する際など《病棟スタッフとの連携における難しさがある》こと、《患者選定が難しい》ことなどが挙げられていた。

2. 学習ニーズについて
分析により分類された学習ニーズは（以下【 】で示す）、「看護記録の書き方、看護過程について」「学生の多く使っている看護理論」などの【実習記録と看護過程・看護理論】、【カンファレンスの進め方】のような実習での指導法に関する基本的な知識の他、【近年の学生の特徴や学習内容】があげられた。また、【学

生とのコミュニケーションの取り方】の他、「実習がうまくいったと、学生から評価がある場面などがあれば具体例を聞かせてほしい」「学生・教員が実習の場に望むこと」のような【学生・教員の視点から実習に望むこと】、あるいは【他施設での学生との関わり方の実際】のように、実際の事例や学生の声を通して、実習における学生への関わり方を学びたいという意見も挙げられていた。

V. 考察

本調査の結果から、指導上の困難として、学生が記載した実習記録に対して自身が行う指導が的確であるのかどうかについて自信がないといった、看護過程や実習記録に関する指導の困難さを実習指導者は強く感じており、実習記録や看護過程、ならびに近年の学生の学習内容を学びたいという学習ニーズを持っていた。また、看護技術の指導においては、学生のレディネスや実習で求められている到達目標への理解が曖昧な中で、指導をすることへのとまどいを感じていることが明らかになった。本調査では回答者の半数以上を40歳代の実習指導者が占めていたことから、自身が学んだ看護教育カリキュラムとの変化の中で、現在学生が学んでいる看護過程の基礎的知識や、看護技術を学内演習等でどの程度習得しているのか、実習での指導がどこまで求められているのかがわからず指導上の困難を感じていたことが反映していると考えられる。先行研究でも、実習記録の指導に対する困難さ（高橋ら、2010）や、自分が学んだことと現在のカリキュラムが違うことに伴う実習指導の困難さ（石崎と池田、2008）を実習指導者が感じていることが指摘されていた。これらをふまえて、研修会の内容として、現行のカリキュラムにおける看護過程や看護技術に関する学生の学習内容について実習指導者が具体的に理解できるよう、看護過程・看護理論と実習記録の関連性や教員が行っている指導の実際、学内演習等での看護技術の指導状況を実習指導者と共有するような研修会が求められていると考える。

また、実習指導者は、学生が実習で感じている思いをつかめない中で、助言をしたり自己学習を促したりすることに迷いを感じている様子が見受けられた。学習ニーズにおいても、学生の声や他施設での実践に触れることを通して、学生の視点からみて適切で、かつ実際的な指導方法を知りたいという思いを持っていた。そのため、研修会においては、学生の実習体験についての理解を高め、より実践的な指導能力の向上に

つながるような研修会を企画していくことが求められる。実習による成果として学生が得た学び・成長を実習指導者側にもフィードバックしていく機会をもつことや、事例を通して効果的な指導方法を考える、あるいは実習指導での成功体験を共有しあうような、実習指導者と教員が共に学ぶグループワーク形式の研修を取り入れていくことも重要であることが示唆された。

しかし、質問紙の回収率が46.3%と低かったことから、本調査結果をそのまま実習指導者の共通した意見として適用していくことには限界がある。今後も、研修会等で意見を聴取しながら、実習指導者の学習ニーズを継続して把握していきたいと考える。

VI. 結論

本調査の結果から、現行のカリキュラムにおける学生の看護過程や看護技術の学習状況、また、学生の声や他の指導者の実践報告をふまえたより実践的な指導方法を学ぶことが、実習指導者研修会の内容として実習指導者に求められていることが示唆された。

謝辞

本調査にご理解ご協力をいただきました実習指導者並びに実習施設管理者の皆様にご心より感謝申し上げます。

文献

- 細田泰子, 山口明子 (2004) : 実習指導者の看護学実習における指導上の困難とその関連要因, 日本看護学会雑誌, 27 (2), 67-75.
- 石崎邦代, 池田正子 (2008) : 臨地実習指導者がかかえている指導上の困難とその支援 - 実習指導者へのアンケート調査より -, 日本看護学会論文集 看護教育, 38, 228-230.
- 志田久美子, 袖山悦子 (2011) : 臨地実習指導者の実習指導上の困難とサポートのあり方の検討 - 臨地実習指導者講習会での学びとの関わり -, 日本看護学会論文集 看護管理, 41, 144-147.
- 高橋悦子, 松本千恵子, 池田光子, 他 (2010) : 臨地実習指導者が実習指導を通して抱く思い - アンケートの自由記述の分析より -, 日本看護学会論文集 看護教育, 40, 158-160.